

荒垣秀雄天声人語賞 中学生の部／中学生・高校生の部 特選

飛騨市立古川中学校 一年 向林 巧貴

ふと、時間が空いたときに眺める、僕が宝物にしている、小学校の卒業アルバム。ページをめくると小学校六年生の頃の風景やぎわめきやにおいまで思い出されるほどだ。

僕たちの学年は五年生の終わりの三月から新型コロナウイルスまん延による緊急事態宣言により休校となり、学校へ行くことができなかった。それは五月の終わりまで続いたため、休校中に六年生になってしまった。これまでの六年生より二カ月も短い一年間。先生や親たちはいろんな行事を僕たちに行き先が違っただけ今までのように行えるよう一生懸命考えてくださった。僕たちも二カ月短い一年間を力いっぱい「駆け抜けた」実感がある。

運動会の開催のために、六年生で話し合っただけ校長先生に直談判もした。修学旅行は車で一時間の範囲内だった。それでもみんなで修学旅行に行けるとなった時は大興奮だった。こんなに近くにも知らないことがたくさんあることに気付くことができた。

参加者が限られていたり、内容が短縮されたり行き先が違ったり、行事の写真はどれも今までの六年生のそれとは全く違う景色になっている。でも、マスク姿のみんなはその写真もものすごくいい笑顔を見せている。

先生はいつも「時間」について厳しかった。給食の配膳ではいつも時間を測っていたほどだ。あるとき先生が「一日は二四時間しかなくて限られている。一分一秒でも大切にしたいことができない。」と話されたことをよく思い出す。人は大人も子供も誰でもが一日には二四時間が与えられていてそれ以上でもそれ以下でもない。その時間をどれだけ大切にできるかでできることが違い、毎日の充実感が変わってくるのだと思う。力いっぱい過ごしていたから卒業アルバムに写っているみんなはいい笑顔をしているのだと思う。

僕の宝物は卒業アルバムに収められている「小学校六年生の一年間」という時間であり、コロナ禍に学んだ物事なのだと気づいた。